

# 「大内裏図考証」と裏松固禪

150626 吉田早苗

はじめに

## I. 内裏の変遷

延暦13年(794) 平安遷都

延暦年間(782—806) 内裏の成立

天徳4年(960) 遷都以来最初の内裏焼失

貞元元年(976) 藤原兼通の堀河殿が最初の里内裏(臣下の邸宅を内裏としたもの)となる

安貞元年(1227) 内裏焼失、以後再建されず

元弘元年(1331) 光厳天皇(北朝)が土御門東洞院殿を内裏とする。

以後この位置を動くことはなかったが、規模や構成はその時の事情により変化した。

荒廃した時期も長く織田信長や豊臣秀吉が整備を行い、徳川幕府も焼失などにより

8度造営している。

天明8年(1788) 内裏焼失(宝永内裏)

寛政2年(1790) 内裏完成(寛政内裏)

安政元年(1854) 寛政内裏焼失

安政2年(1855) 安政内裏再建

明治2年(1869) 明治天皇の東京行幸、通称「京都御所」

## II. 『大内裏図考証』

・平安京の構成、大内裏・内裏の殿舎などについての精密な考証書 裏松固禪編

古代から近世までの膨大な史料を典拠として引用し、細部まで復元する

・正編(献上本、清書本): 固禪が寛政9年(1797)朝廷に献上した本。30巻50冊(目録3冊)

現在宮内庁書陵部所蔵

・裏松固禪関係の史料

『大内裏図考証』・『皇居年表』などの固禪の著作の下書き・稿本・写本など

固禪が収集・書写した史料

朝廷・貴族からの諮問を受けて固禪が作成した勘文案と書状など

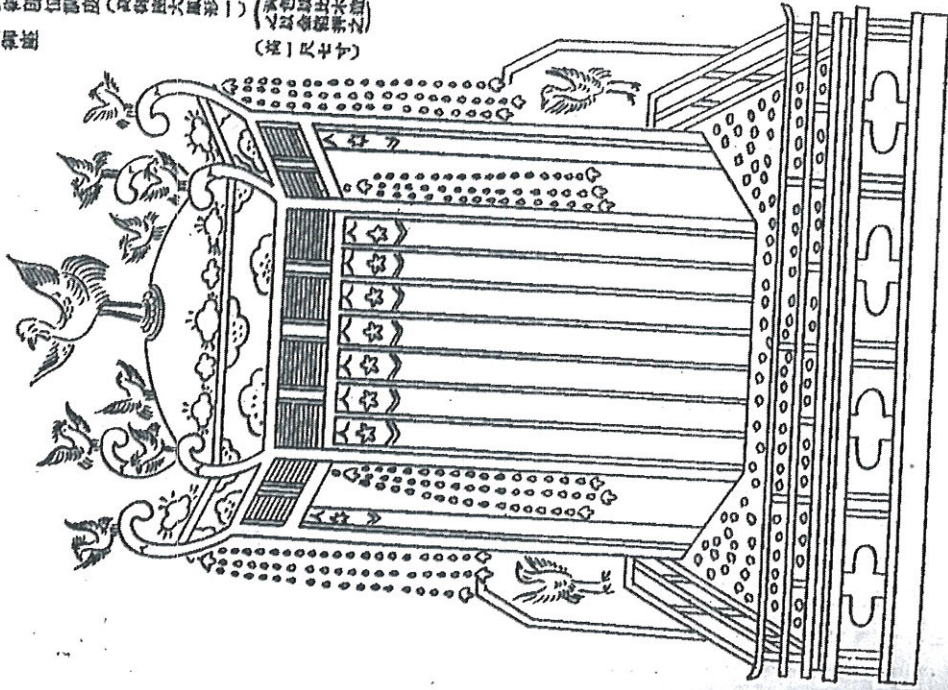
III. 裏松固禪・『大内裏図考証』関係年表

元文元年（1736）	11月11日	裏松固禪誕生。本名光世、前内大臣烏丸光栄末子。
延享4年（1747）	7月23日	前権中納言裏松益光の養子となり家を継ぐ。（12歳）
寛延2年（1749）	10月26日	元服。（14歳）
宝暦8年（1758）	3月25日	蔵人、4月1日左少弁。（23歳）
	7月23日	竹内式部京都所司代に拘束される。（宝暦事件）
	24日	式部の門人の一人として出仕を止められ、25日所職を辞す。
宝暦10年（1760）	5月27日	四辻実長の子（謙光）を養子とする。（25歳）
	7月20日	落飾して固禪と称す。
安永7年（1778）	6月25日	出行を許される。（43歳）
天明4年（1784）	3月19日	『皇居年表』正編5冊完成。摂政九条尚実に献上。（49歳）
		この前後に『大内裏図考証』（正編・続編）の執筆を本格化。（一次稿本）
天明8年（1788）	正月30日	京都大火、内裏焼亡。
	3月16日	参内を許され、25日参内。（53歳）
	4月1日	朝廷より内裏造営に関して諮問を受ける。
寛政2年（1790）	11月22日	新造内裏完成、光格天皇還御。
寛政6年（1794）	5月	朝廷から『大内裏図考証』献上を命ぜられる。（59歳）
		『大内裏図考証』下書本（二次稿本）の作成。固禪以下16名が担当。
		『大内裏図考証』清書本（献上本）の作成。固禪以下29名が担当。

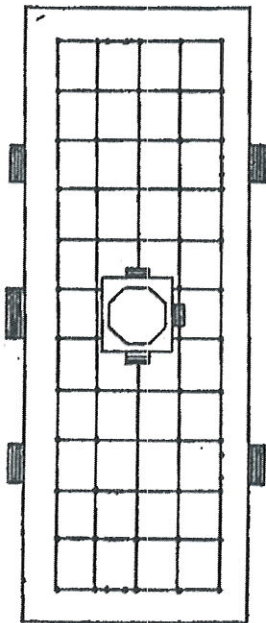
文安御位調度圖

文安御位調度(高御座大風形一) (高御座此木製) (又高御座之) (高一尺七寸)

高御座



御抄抄本經殿及土壇等圖



同 同 同 同  
亭 亭  
北面同之 自做五面同之

蓋裏内、葺大銀一面、以六寸釘固之、角木下、懸玉各一  
波、共内一尺許、懸玉相類、共内懸彫物蛇舌、符纏圖之、  
自總六方、共内懸紫織帷四帖、先懸伴條之、後懸配亭之、  
香玉各一枚、共内懸紫織帷四帖、紫織帷、紫織帷、九幅四帖、有懸  
赤唐面以東爲上、東面以南爲上、赤唐文、以高御座敷經調  
端大拍三枚、共上敷唐銅端流蘇、打物、共上敷唐敷殿端  
西、張白織織五寸許、懸上有赤紐、共上加東貝銅器一枚、例左  
立、懸銅御息一、右立懸御息、御座中立、懸几帳一、  
懸赤唐織、打木、土唐上、非、敷赤唐地唐錦、所、置銀子、  
形、懸赤唐織、  
合、懸赤唐織、  
進清、敷殿四座一枚、爲辨政座、